漱石

夏目漱石

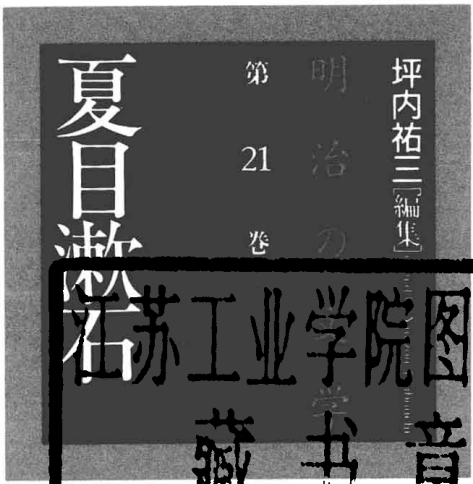
明治の文学

第21巻

坪内祐三［編集］edited by Yuzou Tsubouchi

筑摩書房

Sousekı Natsume



苏州工业学院图书馆
藏书章

筑摩書房

明治の文学
第21巻　夏目漱石

二〇〇〇年十一月十日　初版第一刷発行

編者　坪内祐三　井上章一
発行者　菊池明郎
発行所　筑摩書房
東京都台東区蔵前二-五-三　〒一一一-八七五五
振替〇〇一六〇-八-四一二三
印刷　明和印刷株式会社
製本　株式会社積信堂

ISBN4-480-10161-6 C0393 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。
ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。
〒三三一-八五〇七　大宮市櫛引町二-六〇四
筑摩書房サービスセンター
電話〇四八-六五一-〇〇五三

迷える子（ストレイ・シープ）という言葉は解った様でもある。又解らない様でもある。解る解らないは此言葉の意味よりも、寧ろ（むし）此言葉を使った女の意味である。三四郎はいたずらに女の顔を眺（なが）めて黙っていた。すると女は急に真面目（まじめ）になった。

「私（わたくし）そんなに生意気に見えますか」

其調子には弁解の心持がある。三四郎は意外の感に打たれた。今迄は霧の中にいた。霧が晴れれば好いと思っていた。此（この）言葉で霧が晴れた。明瞭（めいりょう）な女が出て来た。晴れたのが恨（うら）めしい気がする。

目次

三四郎……3
永日小品……343

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

解説―設計された文学―井上章一……432
明治文学年表―坪内祐三……441
夏目漱石年譜……445
同時代人の回想―追想の断片―馬場孤蝶……452

明治の文学

第21巻

夏目漱石

全巻編集　坪内祐三
本巻編集・解説　井上章一
脚注　花崎真也・坂手輝子
脚注図版　林丈二・林節子
編集担当　松田哲夫（筑摩書房）
ブックデザイン　吉田篤弘・吉田浩美

三四郎

一の一

うと〳〵として眼が覚めると女は何時の間にか、隣りの爺さんと話を始めてゐる。此爺さんは慥かに前の前の駅から乗つた田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだ[2]と思つたら脊中に御灸の痕が一杯あつたので、三四郎の記憶に残つてゐる。爺さんが汗を拭いて、肌を入れて[3]、女の隣りに腰を懸けた迄よく注意して見てゐた位である。

女とは京都からの相乗である。乗つた時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線[4]に移つて、段〻京大坂へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じてゐた。それで此女が車室[5]に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は実際九州色であつた。

三輪田の御光さん[6]と同じ色である。国を立つ間際迄は、御光さんは、うるさい女であつた。傍を離れるのが大いに難有かつた。けれども、斯うして見ると、御光さんの様なのも決して悪くはない。

唯顔立から云ふと、此女の方が余程上等である。口に締りがある。眼が判明して

(1) あわてた、調子はずれな。
(2) 袖から腕を抜いて肌をあらわにした。
(3) 抜いた腕をまた袖に入れて。
(4) 神戸・下関間の鉄道線。山陽鉄道株式会社の鉄道として明治三四年に全通。明治三九年国有化。
(5) 車内。

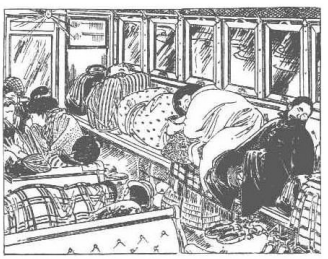


図1

(6) 郷里（福岡県）で、三四郎に結婚を申し入れている女性。なお、三輪田は実在しない地名。

ゐる。額が御光さんの様にだゞつ広くない。何となく好い心持に出来上つてゐる。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。時々は女と自分の眼が行き中る事もあつた。爺さんが女の隣りへ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。其時女はにこりと笑つて、さあ御掛けと云つて爺さんに席を譲つてゐた。夫からしばらくして、三四郎は眠くなつて寐て仕舞つたのである。

其寐てゐる間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。眼を開けた三四郎は黙つて二人の話を聞いて居た。女はこんな事を云ふ。——

小供の玩具は矢つ張り広島より京都の方が安くつて善いものがある。京都で一寸用があつて下りた序に、蛸薬師の傍で玩具を買つて来た。久し振で国へ帰つて小供に逢ふのは嬉しい。然し夫の仕送りが途切れて、仕方なしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉に居て長らく海軍の職工をしてゐたが戦争中は旅順の方に行つてゐた。戦争が済んでから一旦帰つて来た。間もなくあつちの方が金が儲かると云つて、又大連へ出稼ぎに行つた。始めのうちは音信もあり、月々のものも几帳面と送つて来たから好かつたが、此半歳許前から手紙も金も丸で来なくなつて仕舞つた。不実な性質ではないから、大丈夫だけれども、何時迄も遊ん

(7) 京都市中京区新京極にある妙心寺如来堂。また、その本尊薬師如来の俗称。
(8) 広島県南部の地名。旧海軍の軍港。
(9) 日露戦争。明治三七～三八年、満州・朝鮮の支配権をめぐって起こった日本とロシアとの戦争。
(10) 中国遼寧省旅大（リュイター）市の一部。日露戦争最大の激戦地。現在は大連市。
(11) 旅順とともに旅大市を形成する都市。日露戦争後、日本の租借地となり、日本から出稼ぎに行く人も多かった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

で食てゐる訳には行かないので、安否のわかる迄は仕方がないから、里へ帰つて待てゐる積だ。

爺さんは蛸薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちは只はい〳〵と返事丈してゐたが、旅順以後急に同情を催ふして、それは大いに気の毒だと云ひ出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とう〳〵彼地で死んで仕舞つた。[1] 一体戦争は何の為にするものだか解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価[2]は高くなる。こんな馬鹿気たものはない。世の好い時分に出稼ぎなどゝ云ふものはなかつた。みんな戦争の御蔭だ。何しろ信心が大切だ。生きて働らいてゐるに違ない。もう少し待つてゐれば屹度帰つて来る。——爺さんはこんな事を云つて、頻りに女を慰めて居た。やがて汽車が留つたら、では御大事にと、女に挨拶をして元気よく出て行つた。

一の二

爺さんに続いて下りたものが四人程あつたが、入れ易つて、乗つたのはたつた一人しかない。固から込み合つた客車でもなかつたのが、急に淋しくなつた。日の暮れた所為かも知れない。駅夫が屋根をどし〳〵踏んで、上から灯の点いた洋燈を

(1) 日露戦争の戦死・戦病死者は一〇万六八二〇人という。

(2) 「しょしき」は諸式または諸色で、種々の品物の意。また「諸式高直（こうじき）」などから、物の値段の意。

挿し込んで行く。(3) 三四郎は思ひ出した様に前の停車場で買つた弁当を食ひ出した。

車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸の(4)頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛(5)である。下を向いて一生懸命に箸を突込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひよいと眼を挙げて見ると矢つ張り正面に立つてゐた。然し三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した。只三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべき所を、すぐと前へ来て、身体を横へ向けて、窓から首を出して、静かに外を眺め出した。風が強くあたつて、髪(6)がふわ〳〵する所が三四郎の眼に這入つた。此時三四郎は空になつた弁当の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であつた。風に逆つて抛げた折の蓋が白く舞ひ戻つた様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと気が付いて、不途女の顔を見た。顔は生憎列車の外に出てゐた。けれども女は静かに首を引つ込めて更紗(7)の手帛で額の所を丁寧に拭き始めた。三四郎は兎も角も謝まる方が安全

(3) 屋根に直径二五センチくらいの穴があり、昼間はふたがしてあるが、夜には開いてランプを吊るす。
(4) 焼いた鮎を醤油とみりんで煮たもの。
(5) 食べ終わろうとしているところ。
(6) 頭の左右の側面の髪。

図2

(7) インドから渡来した、種々の色で模様を描きだしたり染めたりした綿布。異国風な趣が好まれて、和更紗として日本でも作られた。

図3

だと考へた。

「御免なさい」と云つた。

女は「いゝえ」と答へた。まだ顔を拭いてゐる。三四郎は仕方なしに黙つて仕舞つた。女も黙つて仕舞つた。さうして又首を窓から出した。三四人の乗客は暗い洋燈の下で、みんな寐ぼけた顔をしてゐる。口を利いてゐるものは誰もない。汽車丈が凄じい音を立てゝ行く。三四郎は眼を眠つた。(1)

しばらくすると「名古屋はもう直でせうか」と云ふ女の声がした。見ると何時の間にか向き直つて、及び腰になつて、顔を三四郎の傍迄持つて来てゐる。三四郎は驚ろいた。

「さうですね」と云つたが、始めて東京へ行くんだから一向要領を得ない。

「此分では後れますでせうか」

「後れるでせう」

「あんたも名古屋へ御下で……」

「はあ、下ります」

此汽車は名古屋留りであつた。会話は頗る平凡であつた。只女が三四郎の筋向ふに腰を掛けた許である。それで、しばらくの間は又汽車の音丈になつて仕舞ふ。

次の駅で汽車が留つた時、女は漸く三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内して呉れと云ひだした。一人では気味が悪いからと云つて、頻りに頼む。三四郎

(1) 眼をつぶった。

(2) 腰を曲げ、手を伸ばして物を取ろうとする姿勢。

(3) こうり。旅行用の荷物を入れる、竹・柳などで編んだもの。

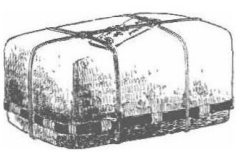


図4

も尤もだと思つた。けれども、さう快よく引き受ける気にもならなかつた。何しろ知らない女なんだから、頗る躊躇したにはしたが、断然断わる勇気も出なかつたので、まあ好い加減な生返事をして居た。其うち汽車は名古屋へ着いた。

一の三

大きな行李(3)は新橋迄(4)預けてあるから(5)心配はない。三四郎は手頃なズック(6)の革鞄と傘丈持つて改札場(7)を出た。頭には高等学校の夏帽(8)を被つてゐる。然し卒業したしるしに徽章丈は挽ぎ取つて仕舞つた。昼間見ると其処丈色が新らしい。後から女が尾いて来る。三四郎は此帽子に対して少々極りが悪かつた。けれども尾いて来るのだから仕方がない。女の方では、此帽子を無論たゞの汚ない帽子と思つて居る。

九時半に着くべき汽車が四十分程後れたのだから、もう十時は過つてゐる。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口の様に賑やかだ。宿屋も眼の前に二三軒ある。たゞ三四郎にはちと立派過ぎる様に思はれた。そこで電気燈の点いてゐる三階作りの前を澄して通り越して、ぶ

(4) 新橋駅。大正三年に東京駅ができるまで、新橋が東京の表玄関だった。
(5) 「チッキ」という手荷物託送制度を利用して、乗車券の区間内ならば無料で送ることができた。三等で一八キログラムまで。
(6) 木綿や麻の太い糸をよって平織りにした、丈夫な布地。
(7) 改札口。

図5

(8) 当時、高等学校の卒業は七月、大学の学期始めは九月。
(9) 当時はまだランプが圧倒的で、電気灯がついているのは一流旅館のしるし。

ら〳〵歩行いて行つた。無論不案内の土地だから何所へ出るか分らない。只暗い方へ行つた。女は何とも云はずに尾いて来る。すると比較的淋しい横町の角から二軒目に御宿と云ふ看板が見えた。之は三四郎にも女にも相応な汚ない看板であつた。三四郎は鳥渡振り返つて、一口女にどうですと相談したが、女は結構だと云ふんで、思ひ切つてずつと這入つた。上がり口で二人連ではないと断わる筈の所を、入らつしやい、――どうぞ御上り――御案内――梅の四番抔とのべつに喋舌(2)られたので、已を得ず無言の儘二人共梅の四番へ通されて仕舞つた。

下女が茶を持つてくる間二人はぼんやり向ひ合つて坐つてゐた。下女が茶を持つて来て、御風呂をと云つた時は、もう此婦人は自分の連ではないと断わる丈の勇気が出なかつた。そこで手拭をぶら下げて、御先へと挨拶をして、風呂場へ出て行つた。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣りにあつた。薄暗くつて、大分不潔の様である。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考へた。こいつは厄介だとぢやぶ〳〵遣つてゐると、廊下に足音がする。誰か便所へ這入つた様子である。やがて出て来た。手を洗ふ。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分開けた。例の女が入口から「ちいと流しませうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえ沢山です」と断わつた。然し女は出て行かない。却つて這入つて来た。さうして帯を解き出した。三四郎と一所に湯を使ふ気と見える。別に恥づかしい様子も見えない。三四郎は忽ち湯槽を飛び出した。そこそこに身体を拭いて座敷へ帰つて、

(1) ふさわしい。

(2) たえまなく。

坐蒲団の上に坐つて、少なからず驚ろいてゐると、下女が宿帳を持つて来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女の所へ行つて全く困つて仕舞つた。湯から出る迄待つて居れば好かつたと思つたが、仕方がない。下女がちやんと控へてゐる。已を得ず同県同郡同村同姓花二十三年と出鱈目を書いて渡した。さうして頻りに団扇を使つてゐた。

やがて女は帰つて来た。「どうも、失礼致しました」と云つてゐる。三四郎は「いゝや」と答へた。

三四郎は革鞄の中から帳面を取り出して日記をつけ出した。書く事も何にもない。女がゐなければ書く事が沢山ある様に思はれた。すると女は「一寸出て参ります」と云つて部屋を出て行つた。三四郎は益日記が書けなくなつた。何所へ行つたんだらうと考へ出した。

一の四

そこへ下女が床を延べに来る。広い蒲団を一枚しか持つて来ないから、床は二つ敷かなくては不可ないと云ふと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか云つて埒が明かない。面倒がる様にも見える。仕舞には只今番頭が一寸出ましたから、帰つたら聞

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com